

和辻哲郎の哀愁

— 「菜の花物語」から『古寺巡礼』へ —

辻 憲 男

和辻哲郎の創作「菜の花物語」は、明治四十一年（一九〇八）五月に「一高校友会雑誌」に掲載された。和辻は十九歳で、前年二月の習作「炎の柱」に次ぐ第二作であった。後の『和辻哲郎全集』第二十巻所収の頁数にして九頁、約二十枚の短編である。話は、松村という友人が、死んだと聞かされていた相思の人と再会するというものである。書き出しは「少し遅いが吉野山を見て高野山へ出る」とある（結びを欠く）。京をたつて途中奈良で遊んだ。その日、短い時間に女は三度あらわれた。最初は南田堂近く、次は博物館の一室、三度目は春日の社、にこやかに会釈して去った。この夜、松村は己が恋物語をして泣いた。「僕」も泣いた。

大阪で博覧会があった年の春、松村は西の宮の叔母の家で可憐な「桂ちゃん」と知り合った。海岸の台場に行く時、「桂ちゃんは手招きしてニコリと笑った。松村が近づいて行くとそばの石に腰を掛けなさいと言う。二人は黙って向かいあっている。いつまでも黙っている。松村はたまらなくなつてふいと台場を出た」（台場は西宮砲台）。二人の交際は周囲から庄迫された。彼が腸チブスで入院したあと、「父は松村の放縦な新生活を泣いてしかつた。父は桂子が先月の末に同じ病にかかって死んだ事を話して、桂子の最後の手紙というのを見せた」。松村は

ついに東京の「古い生活」にたち返った。ところが翌年の春、奈良でそっくりの女性に出会ったのだ。どうやら私たちの計略で、娘を隠していたものらしい。その後の話は僕の日誌に書いてある、云々。

女の顔は『第十二夜』のヴァイオラの「画像」を思い出させた。「優しい、可憐な、いたいけな少女」は、本邦初訳の『沙翁物語』にあったヴァイオラの挿絵をさすのであろう（後に『自叙伝の試み』に記す「通俗世界文学」叢書の一編、ラム姉弟原著、杉谷代水編訳、明治三十六年刊。「マクベス」「あらし」「十二夜」を収める）。ヴァイオラは難破船から海岸に漂着し、男装の麗人となった。心中に公爵を慕い、女伯爵に求愛され、生き別れた双子の兄と再会する。「菜の花物語」の後半部、松村は漂泊の旅に出て船中で病気になる。松村と「僕」は二人で一人の人物である。あるいは双子の兄になり、あるいは公爵や女伯爵になる。純愛物語の構想は、喜劇『十二夜』の女―男の平行と交錯を知つての上である。これを広義の影響関係と言つてもよいであらう。

*

松村は汽車の中で桂ちゃんに出会い、博覧会場で一緒になり、楊柳観音像や、岡田画伯の『木魂』こだま（誤記）や、夜のイルミネーションに印象づけられた。絵について熱心に説明した。「その時分は松村もまだ僕のような思い切つた浪漫的な男」であつた。桂ちゃんが叔母さんに友だちの悲しい話をしていた。

博覧会のことは、昭和三十六年刊の『自叙伝の試み』の「中学生」の章に詳述されている。明治三十六年三月、和辻は十四歳で、西宮の従兄の家から見物に出かけた。汽車の混雑や和田・岡田画伯の絵やイルミネーションは同じ話題であるが、さらに、大阪という大都會のこと、X線透視の見せ物、電気照明の進化等に言及している。「村の子」は博覧会に刺激されて都会への「憧れ」を抱いた。次いで同年五月の藤村操の「巖頭之感」と、その中の「ホレーシヨの哲学」が「人生の意義についての反省」を促した。夏休みになって、三高生の兄のもたらしたキーツの『レミア』の翻訳に強く魅せられた。シェイクスピアやギリシア神話や『神曲』等の世界文学に親しんだの

も、この時期と相前後するという。

蛇女レイミアは海岸で青年リシアスを待ち受け、彼の心を捕えたあと共に宮殿に入る（原詩の第一部）。やはり女妖が哲学者を誘惑する。女性は美しい憧れであり悩ましき魔性である。田舎の中学生は楊柳観音や『木魂』の女に驚き、ヴァイオラやレイミアに揺さぶられた。「菜の花物語」においては、桂ちゃんがそれらの如実の現われである。女は愛と美の光彩であると同時に、まさしく男の修業を妨げる迷妄である。松村は「再び父母の恩愛という羈に縛られた。松村は学士にならねばならぬ」。そういう女性原理―男性原理の背反と葛藤は、明治文学の時代精神でもあった。

*

『古寺巡礼』は大正八年（一九一九）五月に岩波書店から刊行された。前年の五月、二十九歳の和辻は「哀愁のこゝろ」を抱いて、友人らとともに京から奈良、斑鳩へ古美術を見て回った。――この書は「若い情熱」と「幼稚」の同居する印象記・旅行記である、学問の書ではない、しかしこの二つは不可分であって、それだからこそ空想や想像力の飛翔にめぐまれた――戦後の「改版序」にみずからそのように振り返った。「三十年前に古美術から受けた深い感銘や、それに刺戟されたさまざまの関心」を大切に保存したいとも書いた（昭和二十二年刊）。しかし実際は、改訂本文は初版のそれとかなり違っている。この書のうちに「今の著者がもはや持っていないもの」があると気づきながら、「当時の気持ちを一層はっきりさせるため」に、「文章は添えた部分よりも削った部分の方が」多くなった。その改修のあとについては、すでに谷川徹三の岩波文庫版解説が詳しく説いている（同五十四年）。

以下は初版によって記すが、私見によれば、一書の根底に流れているのはこの「哀愁のこゝろ」にはかならない。それは言わばしめやかに涙にぬれた心であり、また美しく優しいものへの憧れである（第二節⁽¹⁾）。その源は

「菜の花物語」におけることき青少年期特有の浪漫的感傷であり、男性原理に対する女性的なる心情である。たとえば桂ちゃんの心であり、今は上代人の観音崇拜の心である。

奈良博物館の一室に入り、観音像の多さに今更に驚いた（第十一節）。筆は聖林寺の十一面観音から楊柳観音、百済観音、そして法華寺の十一面観音へ及び、光明皇后や天平の女人について考察する。次いで薬師寺、東院堂聖観音に移り、その間々に伎楽面や唐招提寺、また仏画や当麻寺や東大寺等の美術の鑑賞観察を交え、最後に法隆寺から中宮寺の観音に至る。一書の最高の終着点はこの「慈悲」の観音への絶賛である（第四十六・四十七節）。

和辻は心の底から感動し陶醉する。曰く、「なつかしいわが聖女」「神々しいほどに優しい」「たましいのはゝゑみ」「一つの生きた、貴い、力強い、慈愛そのものゝ姿」「あの肌の黒いつや」等々。お傍近くに寄ると、「僕たちはたゞうつとりとして眺めた。心の奥ではしめやかに静かにとめどもなく涙が流れた。そこには慈愛と悲哀との杯がなみ／＼と充たされ、それを嬉しく悲しく飲みほすころがあつた。まことに至純な美しさで、また美しいとのみでは云ひつくせない神聖な美しさである」。傍線を付した一文は改訂版にはない。この「嬉しく悲しく飲みほすころ」とは、わが心の奥のしめやかな涙と等しく、文字どおり巡礼者の「哀愁のころ」に共感する心である。聖女は聖母ではない。「わが聖女は、およそ人間の、或は神の、「母」ではない。そのうひうひしさは「処女」のものである。がまたその複雑な表情は、人間を知らない「処女」のものとは思へない。と云つて「女」では更にはない。ヴィナスはいかに浄化されてもこの聖女にはなれない。しかもなほそこに女らしさがある。女らしい形でなければ現はせない優しさがある。では何であるか。——慈悲の権化である。人間心奥の慈悲の願望が、その求むるところを人間の形に結晶せしめたものである」。

『古寺巡礼』の構想を一口に言うならば、父の男性原理をついに観音の女性原理が抱き取るがとき首尾の調和である。これは十年前の創作と同じ構図である。実際は「次の日には赤不動を見に高野へのぼった」のだが、和辻

は中宮寺を以て一書を締め括った。改訂版ではその呼応が削られた。ところでこの一文は図らずも、かの創作に欠いていた結びの言葉ともなり得ている、松村と「僕」はあれから吉野や高野へは足を伸ばさなかったのであろうけれども。

注

(1) 初版の第二節「哀愁のこゝろ」の全文を左に掲げる。改訂版で削除された部分に傍線を付す〔親爺〕↓「父」の類の小異を除く。

久しぶりに親兄弟の中で一夜を過ごした。逢ふ時に嬉しいと思ふだけ別れる時にはつらい。今僕は哀愁に胸を閉されながら、窓外のしめやかな五月雨を眺めてゐる。愛とは悲しいものだ。涙にぬれた心のみが、本当に他の心を抱擁するのだ。大慈大悲といふ言葉の妙味が今は頻りに胸にこたえて来る。／昨夜親爺は僕に云つた。お前の今やつてゐることは道のためにどれだけ役に立つのだ、頹廢した世道人心を救ふのにどれだけ貢献することが出来るのだ。僕は返事が出来なかつた。五六年前の僕ならイキナリ反撥したかも知れない。しかし今は、親爺の言葉の内容が何であらうとその心持に対して頭を下げないではゐられなかつた。親爺は道を守ることに強い情熱を持った人だ。医は仁術なりといふ標語を片時も忘れず、その実行のために自己の福利と安逸とを捨てゝ顧みない人だ。僕は絶えず生活をフラフラさせて、わき道ばかりにそれてゐる。生活の中心を外れた興味に足をさらはれることも稀でない。もし僕に大道を歩んでゐるといふ確信があるならば、親爺が何と云はうと僕はビクともしないが、自分ながら自分の動揺に愛想がつかかゝつてゐる時であるだけに、僕にはその言葉がひどくこたえた。／実をいふと僕には古美術の研究といふ事が自分にとつてわき道だと思はれるのだ。今度の旅行も、古美術の力を享受することによつて、自分の心を洗ひ、さうして富まさう、といふに過ぎぬの

だ。もとより鑑賞のためには幾何かの研究も必要であり、また古美術の優れた美しさを同胞に伝えるために論文を書くといふことも意味のないことではない。僕はその仕事を耻づべき事とは思はない。しかしそれが自分の中心の要求を満足させる仕事であるかどうか。自分の興味は確かに燃えてゐる。しかしその興味は真実に美術の研究を目指してゐるかどうか。自分の表現欲は古美術から受けた印象を語らしめずには措かない。しかしその表現欲は真実に古美術の美しさの紹介で満足するものかどうか。僕は自分が安逸を求めて自分の要求を誤魔化してゐるといふ印象から脱れる事が出来ない。僕は興味が自分を去らない限りは、この事を続けて行くだらう。しかしそれを自分の唯一の仕事とすることは、——若くはそれを自分の第一の仕事とすることは、とても自分の中心の要求が許さない。——雨はまだしとくと降つてゐる。烟つたやうな雲に半ば隠された比叡山が見えて来た。古い京のしつとりとした雰囲氣がもう自分を包んでしまつたやうに思はれる。／（五月十七日）

(2) 最終の第四十七節「中宮寺以後」を左に引く。改訂版では傍線部分が削除され、法輪寺の条で終っている。とう／＼中宮寺がすんだ。／僕は曾てこの寺で、いかにもこの観音の侍者にふさはしい感じの尼僧を見たことがあつた。それは十八九の色の白い、感じのこまやかな、物腰の柔かい人であつた。僕のつれてゐた子供が物珍らしさうに熱心に厨子のなかをのぞき込んでゐたので、それをさも可愛い／＼らしく微笑みながら眺めてゐたが、やがてきれいな声で、お嬢ちやま観音さまはほんたうにまつ黒々でゐらつしやいますねえ、と云つた。それで僕たちもほゝゑみ交はした。こんなに感じのいゝ尼さんは見たことがないと思つた。——この日もあの尼僧に逢へるかと思つてゐたが、とう／＼帰るまでその姿を見なかつたので何となく物足りない気がした。あんな耳の遠いお婆さんの尼なんぞが威張つてゐるのでは、観音さまもお氣の毒だ、とつひ不服げにつぶやいた。／とう／＼中宮寺を出た。／〔法輪寺の条を中略〕／もう中宮寺を書いてしまつた。／河内の観心

寺、長谷の奥の室生寺、さういふ予定を急に変更して、次の日には赤不動を見に高野へのぼった。いろいろ書きたいこともある。しかし、もう中宮寺がすんだ。それでこの旅行記も終ることにしよう。

中の「もう中宮寺を書いてしまった」の一行は、すでに戦前版重刷において削られていた。関東大震災翌年の「新版」以降かと思われるが、未確認。

(二〇〇九年八月稿、十二月一日改稿)